

球 春

中日ドラゴンズ

2月1日、プロ野球のキャンプ解禁。

3年目を迎えた与那嶺中日は打倒巨人へ総決起、本拠地中日球場では早くも鋭い打球音が響きます。主砲谷沢は今年も相変わらず好調、古巣へ帰った広野もこれが最後と気分一新。卒業試験のためキャンプインがおくれていたドラフト1位のルーキー藤波は6日から参加、首脳陣に見守られ、やや緊張した表情です。しかし、ランニングだけは欠かさなかったというだけあって動きも軽く、早くも中日の一員として溶け込んでいます。基本プレーの徹底と打線の強化を重要テーマとした今年のキャンプ、20年ぶりのペナント奪取をめざして中日与那嶺はスタートしました。

倒 産

国民のインフレにあえぐ生活を反映して春闘は例年より、1ヶ月も早くそのスタートをきった。肌寒い1月26日、明治公園は3万人の労働者と赤旗で埋まった。その中に結成間もない東京富士運輸労働組合のメンバーの姿があった。彼等にとってはじめての経験であった。去年の暮れ、12月18日、不渡り手形を出して倒産。従業員は寝耳に水だった。その夜から社長は消えた。

大型冷凍車など27台を持ち、年商2億4千万の中堅の運輸会社であった。石油危機による燃料供給制限と値上がり、金融引き締めの前に社長の放漫経営はもろくもくずれた。ディーラーは車をひきあげた。今は数台の冷凍車が残るだけ。従業員は、せめて自分たちの未払い賃金を確保しようと、1月15日、労働組合を結成した。更に会社再建の夢を捨てず、荷主の協力を得て、自主運行を続けた。当面の生活費の確保のためにも、三島の某冷凍庫から問屋の倉庫へと食品を運搬した。かたわら、カンパ活動や売り掛金の回収にもあたった。

倒産して1ヶ月以上過ぎても、社長の行方は皆目つかめなかった。そんな中で、1月29日、債権者会議が開かれた。債権者は、労働債権として売り掛金を差しおさえている組合側に対し、「あまり権利意識をふりかざすなら債権者としては、会社の再建に協力できない。潰すだけだ」の声が飛び交った。彼等の前からはほとんどの車が引きあげられ、1億5千万円の負債が横たわる中、再建の道は残されているのか。全体会議が開かれ、これからどうするかを皆で討議し合った。

「自主運行をいつまで、このままでやるのか。皆どうなんだ」

「それより執行部は職安でもいって職を探したらどうか」

疑問の渦の中で1人1人が述べる。

「やめさしてもらいたい」「やりたいことがあるからやめます」「金があるていどでたらその時点で解散だね」再建の夢は、彼等の中でいつしか消えていた。売り掛金を全部回収しても、1,720万円の労働債権に満たない。そんな中で彼等の多くは闘争をやめたいと発言して全体会議は終わった。

今夜も、三島へと車を走らす。もう走る事はない道を。